

国立国会図書館



12月
スマスリク
号

電子展示会「江戸の数学」
図書館を越える図書館

世界図書館情報会議 - 第77回国際図書館連盟 (IFLA) 大会

2011.12
No. 609

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
03(3506)3301(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
	<small>※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。</small>	後日複写受付	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
資料請求時間	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00	オンライン複写受付	月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30
	<small>※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。</small>		

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
利用案内 0774(98)1212(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求時間	月～土曜日 10:00～17:15	後日複写受付	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	オンライン複写受付	月～土曜日 10:00～17:00

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	<small>※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。</small>	
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求時間 火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日複写受付 火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30	

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

12 December

CONTENTS

- 02 榎本武揚と写真 たぐいまれなる観察眼
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 04 電子展示会「江戸の数学」
- 10 企画展示「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」から
近代の印刷技術 2 平版（石版）・多色平版（石版）、コロタイプ、網目写真版
- 14 図書館を越える図書館 みんなのための統合、革新、情報
世界図書館情報会議－第77回国際図書館連盟（IFLA）大会
- 21 言葉のエッセイ 第11回 特定か不特定か

-
- 09 館内スコープ
東京本館 本館は50歳！
- 22 本屋にない本
○『千代田の幕末 150年前の世相と文化 平成22年度特別展』
○『東京書籍百年史』
- 24 ND L NEWS
○新副館長就任
○韓国国立中央図書館との第14回業務交流
○法規の制定
- 25 お知らせ
○新しい「全国書誌」
○国際政策セミナー「世界経済の動向と日本の成長戦略」
○国際子ども図書館講演会「谷川俊太郎さんに聞く 一詩は絵本、絵本は詩一」
○平成23年度児童サービス協力フォーラム
○平成23年度アジア情報研修
○本の万華鏡（第8回）「津波一記録と文学一」
○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物
- 31 『国立国会図書館月報』年間索引

榎本武揚と写真

たぐいまれなる観察眼

葦名 ふみ

どこかで一度は、五稜郭の戦いの敗者としての、あるいは明治の高官としての、写真1の人物の名前を耳にしたことがあるかもしれません。ロシア帽に裾までの毛皮コートという装いで一瞬迷いますが、大きな瞳が印象的なこの人物は、榎本武揚（1836-1908）です。写真の裏書によるとサンクトペテルブルクで撮影されたとのこと、特命全権公使（ロシア公使館付）時代（1874-1878）のものでしょうか。

この写真をはじめとして、「榎本武揚関係文書」（東京本館憲政資料室所蔵）には興味深い写真が並びます。徳川家達^{いえさと}（1863-1940）の写真もあれば（写真2）勝海舟（1823-1899）の写真もあり（写真3）、どちらも当時の一流写真館（内田写真館）で撮られています。旧幕臣の榎本は、徳川宗家の幼き当主・家達の写真をどのような心持で眺めたのでしょうか。大鳥圭介（1833-1911）・安藤太郎（1846-1924）・田辺太一（1831-1915）の写真（写真4）は、同時代の日本の写真館と比べると、凝った撮影ポーズが光ります。それもそのはず、Elliot & Fryはロンドンベーカー街の有名写真館でした。

榎本は、日本写真会（明治22（1889）年結成）の会長を務めた当代の写真通でもありました。当時最先端のメディアであった写真に彼は何を求めたのでしょうか。少なくとも、単なる趣味にとどまるものではなかったことは確かなようです。

明治8（1875）年に小笠原の写真が撮影されたときのこと。当時日本政府は、帰属確定の意図もあって小笠原の調査に乗り出し、写真師・松崎晋二を同行させて現地の写真

を撮らせます。この写真を入手した榎本は、実姉への手紙（写真5）に、凝ったメッキ（ガルファン）仕立ての写真帖を自ら制作した、小笠原以南の領有も念頭にあるだけに眺めるのが楽しい、と綴っています。第一線の外交交渉を知る、榎本ならではの写真の見方です。

また、榎本が駐露公使の任を終えた明治11（1878）年、1万3千キロを主に馬車と船で帰国した際の名紀行『シベリア日記』（写真6）を紐とくと、彼が旅程の合間を縫って現地の人物や港湾、風景の写真を収集していることに気づかされます。『シベリア日記』の記述は、榎本の執念に満ちた観察力と描写力に支えられています。昼食に供されたチョウザメの種類について議論し、「その形を熟視し、かつ背筋どほり三条の鱗を数へしに一条ごとに三十五個ありたり」（明治11年9月20日条）と鱗の数を丹念に数える姿にみられるように、物産・地形・交通・天候・人種などの克明な観察と記録が2か月間続いたことに驚嘆を禁じえません。このような観察眼の持ち主であればこそ、写真に関心を寄せたのだらうと納得してしまいます。

「榎本武揚関係文書」所収の56枚は、かつて榎本の手元にあった写真のほんの一部に過ぎないはずですが。彼に宛てられた手紙を読んでいると、政治向きの写真から家族の写真まで、様々な写真が贈られていたことがうかがえます。記録の散逸は世の常ながら、国立国会図書館に残る写真を眺めていると、かつて榎本が持っていた写真の全貌を知りたくなるのです。

（あしな ふみ 利用者サービス部政治史料課）



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

- 写真1 榎本武揚 サンクトペテルブルクにて
 <請求記号 榎本武揚関係文書 17-5>
- 写真2 徳川家達 15歳のころ(裏面とも)
 <請求記号 榎本武揚関係文書 17-28>
- 写真3 勝海舟 <請求記号 榎本武揚関係文書 17-12>
- 写真4 大島圭介・安藤太郎・田辺太一 明治5(1872)年 <請求記号 榎本武揚関係文書 18-38> 田辺(外務少丞)、安藤(外務大録)は岩倉使節団随行中。大島は産業視察のため留学中。
- 写真5 榎本武揚書簡 鈴木親月院宛 明治9年9月12日 <請求記号 榎本武揚関係文書 5-4-1> 「一冊之折手本と為し其表紙に手製の「ガルファニ」仕掛にて(日本領南洋群嶋之真景小笠原嶋之部榎本所蔵)といふ文字を銅版にして取附、「小笠原嶋より尚以南にある「ラドローネン」諸嶋(注・マリアナ諸島の旧名)をも「イスパニヤ」より買入て日本領と為す事を先頃建言」したので「別して楽しみにながめ」る、と書く。駿河台紅梅町の旧内田九一(写真2、3を撮影した写真師)邸を値段が折り合えば購入したいとも綴り、写真的にも興味深い。
- 写真6 シベリア日記 左は甲<請求記号 榎本武揚関係文書 8> 右は乙<請求記号 榎本武揚関係文書 9>
- ※写真1~3は名刺判、4はキャビネ判

参考文献

- 「内務省ヨリ小笠原島写真上呈」(「公文録」明治九年 第二百六十三巻 明治八年十二月~九年十二月 小笠原島処分一件) <国立公文書館請求番号 本館-2A-010-00・公01997100>
- 榎本隆充、高成田享編『近代日本の万能人・榎本武揚 1836-1908』(藤原書店 2008) <請求記号 GK44-J4>
- 『榎本武揚シベリア日記』(講談社 2008) <請求記号 GE485-J5>

電子展示会「江戸の数学」

江戸時代を中心に、日本で独自に発達した数学を、西洋数学と対比して「和算」と呼びます。ねずみ算や鶴亀算を連想される方も多くでしょう。12月21日、国立国会図書館ホームページ上で、和算の実学としての側面を紹介する電子展示会「江戸の数学」が始まります。佐藤賢一氏（電気通信大学准教授）のご協力のもと、和算の歴史をたどり、関連資料45点の本文画像（4千コマ超）を解題とともに掲載しています。

<http://www.ndl.go.jp/math/>

和算の歴史は、中国からそろばんが伝わったことから始まります。そろばんのマニュアルとして江戸時代初めに『塵劫記』^{じんこうき}が刊行され、そろばんの知識が普及しました。その後、算聖・関孝和(?-1708)と彼に続く和算家たちの切磋琢磨の結果、和算は現在の大学初年級レベルまでの発展を遂げました。

和算と西洋数学では、切り口や表現方法は異なりますが、今でいう高次方程式や円周率の計算、三角関数も取り扱っています。パズルのような数

学遊戯の面から紹介されることも多い和算は、江戸時代には、田畑面積の計算や商業に不可欠だけでなく、農地開発、土木工事、暦法計算や地図作成の測量などのために必要な実学でした。

江戸時代の和算書は、明治以降の和算史研究の流れを汲む日本学士院や東北大学が多く所蔵しています。国立国会図書館でも約300点を所蔵しています。

展示資料から、代表的なもの3点をご紹介します。

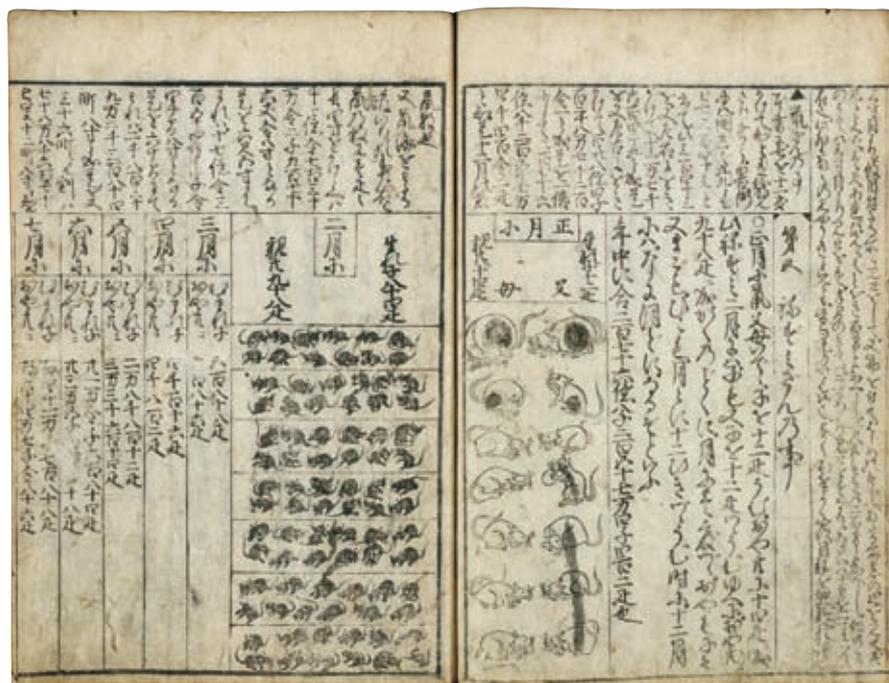
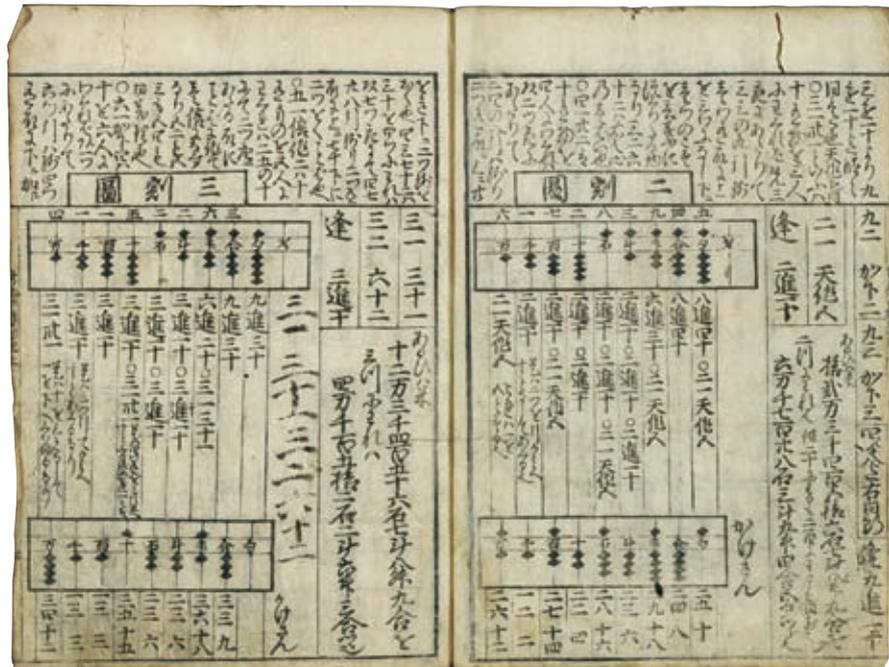
■ 『塵劫記』

京都の豪商一族出身の吉田光由（1598-1673）は、若い頃からそろばんを学び、寛永4（1627）年に『塵劫記』を出しました。商人向けの中国の数学書『算法統宗』を手本にしたといわれます。

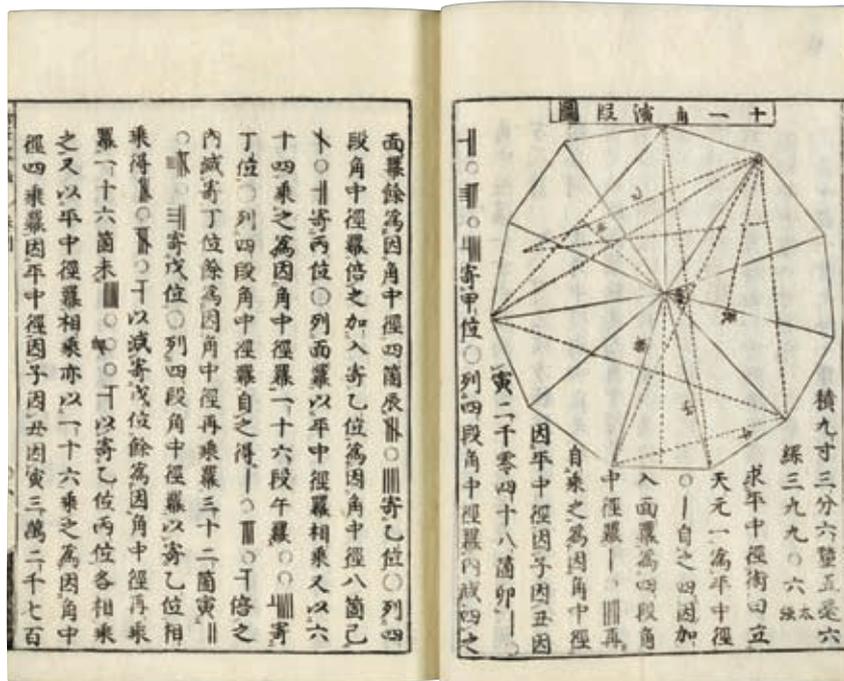
吉田の『塵劫記』は、挿絵が多く、そろばんによる四則演算のほかに、田畑の面積計算、簡単な測量術といった実用重視の内容、ねずみ算、継子立てといった数学遊戯のような問題まで収録していたために、一般向けの数学書として好評を博しました。

人気を受けて、偽版が多く出されたため、吉田は何度も改版を行います。最も普及したのは寛永11（1634）年版で、展示会ではこれに近い内容の元禄2（1689）年版（写真）をご覧ください。吉田による最後の版は、寛永18（1641）年の「遺題本」と呼ばれるもので、解答をつけない難問（遺題）が巻末に掲載されました。以降、遺題に解答し、新たな難問を出題した和算書が次々と出されました。

この『塵劫記』の影響は大きく、明治になっても『開化塵劫記』『明治小学塵劫記』といった本が出されています。



吉田光由著『新編塵劫記』 元禄2（1689）年刊 <請求記号 166-133>
上：上巻冒頭のそろばん絵入り解説 下：遊戯的な問題・ねずみ算の部分

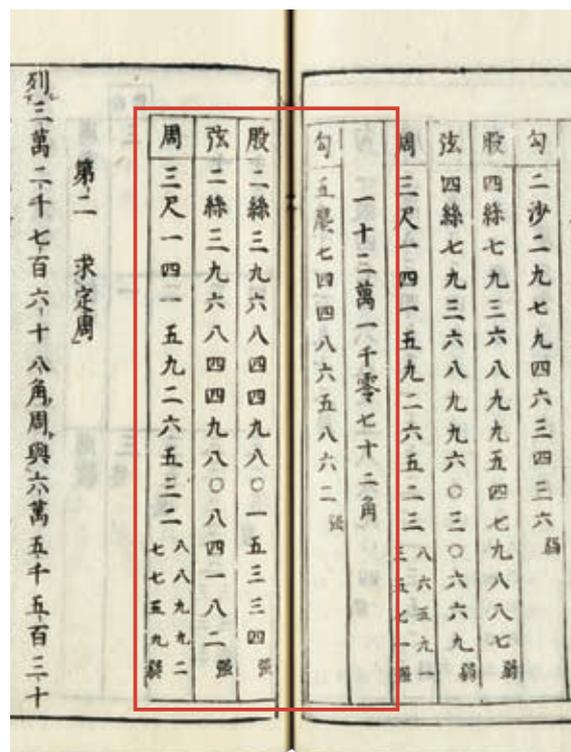


関孝和遺編、荒木村英閣、大高由昌校訂『括要算法』正徳2（1712）年刊
 <請求記号 112-63>
 上：天元術を応用して、直径1の円に内接する多角形から、円周率を求めている。
 下：最終的に、正13万1,072角形の周の長さは3.1415926532...と計算している（赤い囲み）。和算書では、算法そのものについての説明はほとんどなく、結論のみ記されていることが多い。

■ 関孝和『括要算法』

算聖とも称えられる関孝和は、江戸時代の数学に方法論的な革新をもたらした人物で、多彩な業績があります。中でも、独自の記号法（傍書法）によって和算の数式表現を向上させたことや、中国の高次方程式の解法「天元術」を応用し、複数の未知数を持つ連立方程式で未知数を簡易に消去する方法を編み出したことで、和算は飛躍的な進化を見ました。

関が存命中に公刊したのは、その業績に比して少ない『発微算法』1点のみで、代表的な『括要算法』（写真）は、没後に門人たちが刊行したものです。彼らはその後「関流」という流派を形成し、その勢力は全国に及びました。

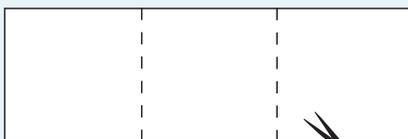
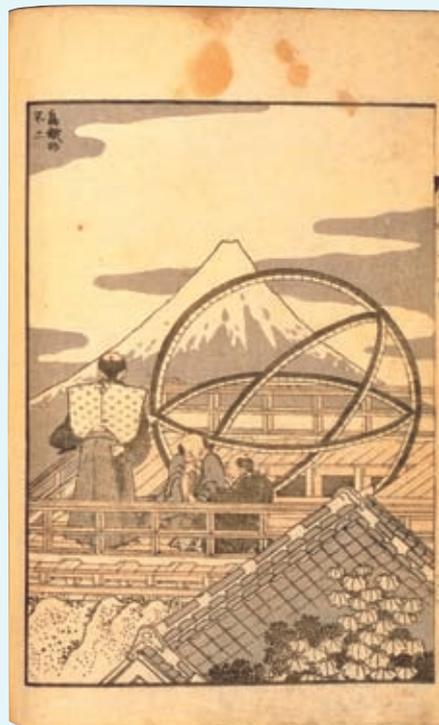


江戸の数学をもっと知るために

電子展示会「江戸の数学」は、和算の実学的な側面に光をあてています。ともすれば、そろばんは商人だけに任せておけばよいなどという考え方も根強かった江戸時代、和算家は、算術が社会に不可欠なものであることを訴えてきたのです。実学として役に立つものならば、西洋の天文暦学や、その周辺にある西洋数学も取り入れました。

図版／葛飾北斎画「鳥越の不二 [浅草天文台の図]」
『富嶽百景 第3編』13丁裏 天保5 (1834) -6 (1835) 年刊
<請求記号 166-62> 天体観測を行う江戸幕府の天文方。

展示会の第1部は、江戸時代初期から明治期までの和算の歴史をたどる6章からなり、各所に関連するコラムを設けています。和算が扱った問題を現代の数学で解説したコラムと和算の腕試し問題は、当時のレベルにあわせているので難易度の高いものも含まれます。数学の歴史と数式に疲れたら、算額（数学の問題が書かれた絵馬）や当時の測量方法についてのコラムで休憩をどうぞ。

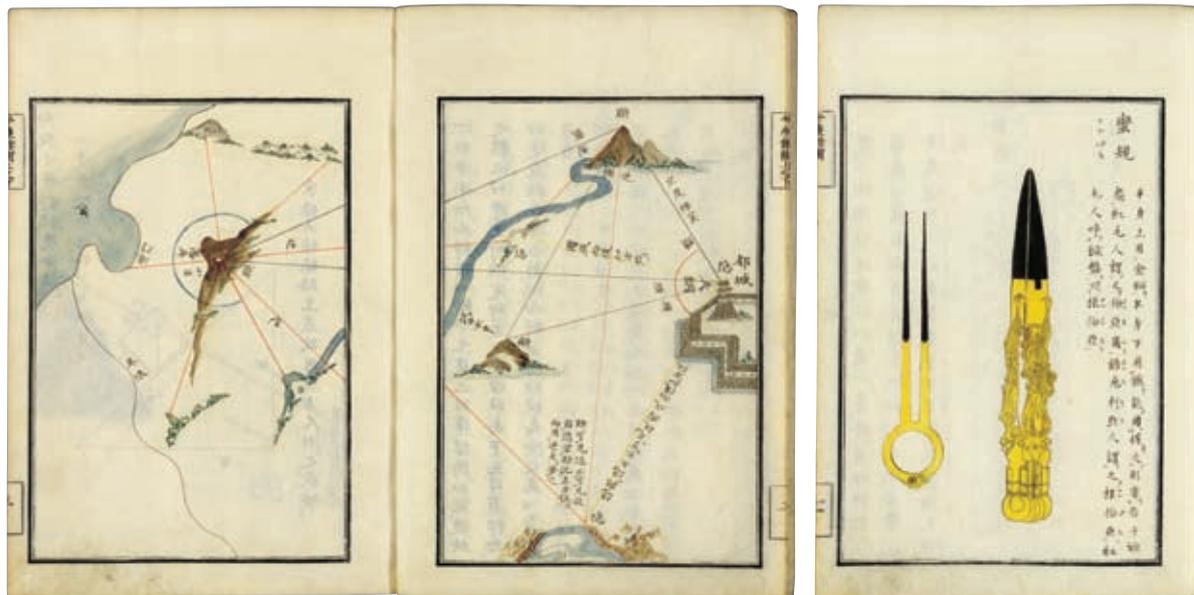


ヒント
最初の長方形と新しく作る正方形が同じ面積であることから、正方形の1辺の長さを考えてみましょう。

コラムと腕試し問題には難易度レベルを表示していますので、好きなところからじっくりとお楽しみください。ここでは「裁ち合せ」をやってみましょう。裁ち合せとは、多角形をハサミで切って並べ直し、もとの多角形と面積の等しい図形を作ることです。

問題 同じ大きさの正方形が3個つながった形の長方形をハサミで切ってつなげ、正方形を1個作ってください。

答え 電子展示会の腕試し問題 Q12 をご覧ください。

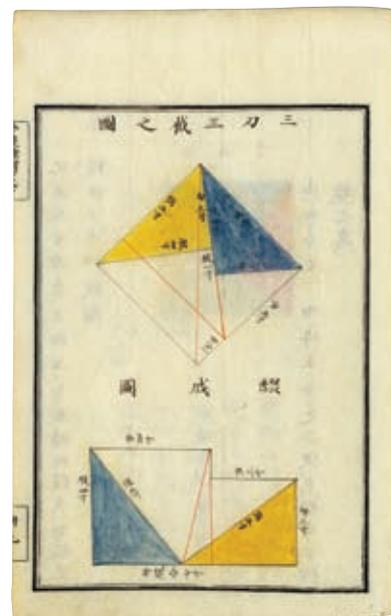


■実学——『分度余術』

江戸の社会で数学が必要とされていたことは、測量、土木工事、天文・暦関係の書物・文書からうかがえます。役人の雑記帳に検地に必要な算術が書かれていたり、堤防の築造・補修法の書物に関連する算術の公式が記されています。

ここでご紹介するのは、儒者・兵学者で、関孝和の弟子とも交流があった松宮観山（1686-1780）がまとめた『分度余術』です（写真）。オランダ由来の測量術、天文学の知識や、和算の知識など、広範な知識が、色鮮やかな図とともに盛り込まれています。

（展示委員会電子展示小委員会）



松宮観山編『分度余術』写 6冊 <請求記号 139-77>
 上・右上：長崎のオランダ人由来の測量術の図もふんだんに盛り込まれている。実測できない場所を測るために、コンパスを使って長さの比をはかりとり、平板に定規で図を書いて計算する。
 右下：裁ち合せ（前頁参照）によるピタゴラスの定理の証明。

「江戸の数学」は、国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 電子展示会 からご覧になれます

東京本館 本館は50歳！

昭和36(1961)年11月に東京本館の現在「本館」と呼ばれる建物が完成・開館し、今年で50年になりました。この機に、小規模ではありますが、建物の歴史を中心とした展示を行います。本館の建設過程にスポットを当てつつ、建築から見た国立国会図書館の歩みをたどるものとしてと考えて、準備を進めています。

50年の間には、本館をめぐる事情がいろいろ変わりました。たとえば、本館の建設時点では、現在最寄り駅である本館西側の地下鉄永田町駅はなく（昭和49（1974）年10月開業）、本館東側の東京都電（路面電車）三宅坂停留所（昭和43（1968）年9月廃止）が来館者のメインアプローチであったことから、来館者用の玄関は東側とされ、国会議事堂に向けた南側は国会関係者玄関、西側に資料の搬出入、職員等の出入口を設ける設計とされました。交通事情が変化したことにより、今では「なぜ、駅から一番遠く、わかりにくい位置に一般利用者の玄関があるのか？」とお問い合わせを受けるようになってしまいました。平成元（1989）年に3階南玄関前の歩道を拡幅して、永田町駅からのアプローチを改善する改修を行ってはいるのですが……。

また、建物・設備の老朽化、OA化、ニーズの変化などのために修繕・改修工事を行っており、建物自体も竣工時点と比べるとずいぶ



ん変化しています。現在も、平成25年度までの予定で、耐震改修工事を行っています。今後も、建物を末永く使っていくために改修が必要になり、ご不便、ご迷惑をおかけすることがあると思います。

今回の展示は、平成24年1月19日から2月14日まで、東京本館2階 本館・新館連絡通路に展示コーナーを設けて行います。国立国会図書館の歴史については機会があるごとに紹介されていますが、今回は、普段見られない建物の裏側もご紹介したいと考えています。図書館の建物にも関心を持っていただくきっかけになれば幸いです。

（管理課 排骨飯）

企画展示

「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」から

近代の印刷技術

2

平版（石版）・多色平版（石版）、
コロタイプ、網目写真版

平成24年2月から3月に開催予定の展示会「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」から、雑誌のビジュアル表現を支えた様々な印刷技術をご紹介します。



平版（石版）

元来は石灰石を版面に用いた。リトグラフともいう（「リト」はギリシア語で「石」の意味）。

仕組み

脂質を含む材料で描画した版面を水で湿らせたのち、油性のインキをのせると、インキが水をはじくため、最初に描画した部分のみにインキがつく。これを紙に転写する。水と油の性質を利用した平版印刷である。

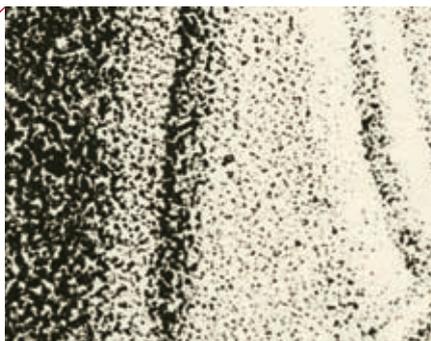
由来

1798年、ドイツのアロイス・ゼネフェルダー（Senefelder, Alois 1771-1834）によって発明された。楽譜など、従来の活字では組めない図版を印刷する手法として広まり、幕末に日本に伝わっ

た。その後、石は重くて扱いにくいため、亜鉛やアルミの金属版を使うようになった。また、直接描画するよりも効率のよい、一度製版したものを転写する方法がとられるようになった。現在のオフセット印刷（次号参照）につながる。

特徴

手で描いたままを刷ることができるため、彫り師を必要とせず簡便なうえに、木口木版（前号参照）よりもさらに精密な印刷が可能となった。コロタイプ（12ページ参照）や網目写真版（13ページ参照）、グラビア印刷（次号参照）といった写真製版が普及するまでは、写実にすぐれた印刷技術として用いられた。



『日本大家論集』 第13編 明治21
(1888)年6月 博文館
<請求記号 雑55-12>
口絵「渡辺華山先生之肖像」
(右は赤枠部分の拡大)
*館内でデジタル画像を閲覧可能。

すでに公刊されている論文を集めた雑誌。当時の有名な学者や作家などによる、幅広い分野の著述が収録されている。自由民権運動の中、比較的手に入りやすい1冊10銭という価格（明治20年のもり蕎麦が1銭）で販売したため、爆発的な売れ行きを示した。毎号の口絵に石版による著名人の肖像が掲載されている。月刊。

連載
目次

- 1 金属凸版、木口木版 608号 (2011.11)
- 3 三色版・原色版、グラビア印刷、オフセット 610号 (2012. 1)



多色平版（石版）

仕組み

使用する色の数だけ平版（石版）を用意し、一枚の紙に重ね刷りしていく手法である。色分解（次号「三色版・原色版」参照）の技術が確立するまでは、カラー印刷の主流であった。クロモ石版とも呼ばれる。

由来

版を重ねる多色刷り印刷は、日本においては浮世絵など木版画の分野で発達していたため、何十回

も刷り重ねる職人技が発揮された。石版を用いた多色刷りの技術は、明治期になってから、雑誌の口絵やポスターで幅広く用いられるようになった。

特徴

使用する色の数だけ版を用意する必要がある。それぞれのインキの色がそのまま活かされ、カラフルな表現が可能である。その反面、何重にも刷りを重ねる作業は非常に手間がかかるため、大量印刷には向かない。



『三越』 第1巻第2号
明治44 (1911) 年4月 三越呉服店
〈請求記号 雑23-23イ〉
懸賞によって選ばれた、橋口五葉
(1880-1921)による石版三十度刷りの表紙。
同じデザインがポスターにも使用された。
(中央は赤枠部分の拡大)

三越のPR誌。非売品で、主に得意先に配布された。杉浦非水 (1876-1965) による表紙など、デザイン史上、重要な雑誌。商品の紹介や催物案内のほかに、読み物や季節の話題など、幅広く収録されている。月刊。

橋口五葉肖像
『三越』
第1巻第2号
明治44(1911)
年4月
口絵p.5
美人画や文学
書の装丁で有
名な画家・版
画家。



国立国会図書館企画展示 ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和

東京会場 平成24年 2月 1日 (水) ~ 3月 2日 (金)
東京本館 新館展示室 10:00~19:00 (土曜 18:00)
関西会場 平成24年 3月 9日 (金) ~ 3月 28日 (水)
関西館 大会議室 10:00~18:00

日・祝・
休館日除く
入場無料



コロタイプ

仕組み

すりガラス板の上にゼラチンを塗布し、その面にネガフィルムを密着・露光させ、版面を変質させる。ゼラチンがインキをはじき、印刷される。
はり
ガラス版とも呼ばれる。平版印刷。

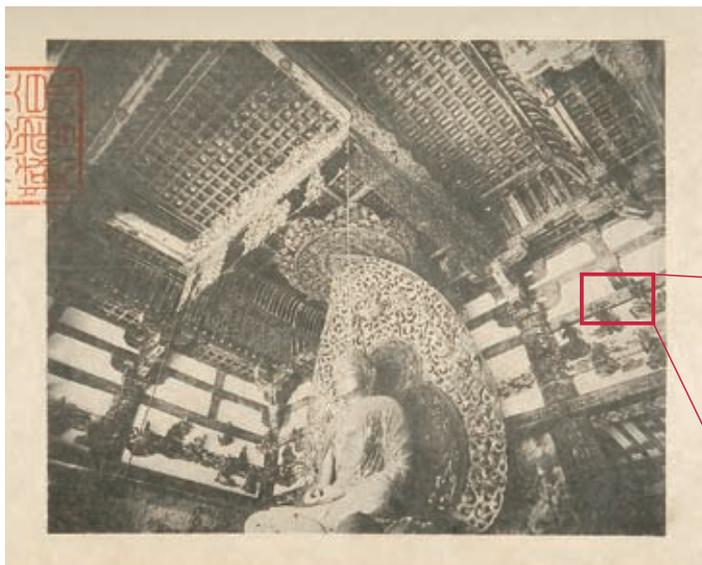
由来

1854年、フランスのアルフォンス・ルイ・ポアテバン (Poitevin, Alphonse Louis 1819-1882) によって発明された。日本では明治期に写真家の小川一真 (1860-1929) や、東京印刷創業者の星野錫 (1854-1938) が技術研究を行った。大量

印刷に向かないため、雑誌で使われることは少なくなり、昭和40年代には主に卒業アルバムの印刷などに使われていた。現在では美術作品のレプリカ作製など、特殊な用途にのみ用いられている。

特徴

変質したゼラチンのシワによって濃淡を表現する。網目写真版 (次頁参照) の印刷では表現できない連続階調 (グラデーション) を表現でき、写真の印刷に適している。しかし、ゼラチンを版に用いるため耐久性に乏しく、数百枚しか刷ることができない。



『國華』 第3号 明治22 (1889) 年12月 國華社 口絵
宇治平等院鳳凰堂内部を撮影し、コロタイプ技術で印刷したもの。
(右は赤枠部分の拡大) <請求記号 Z11-165>
*1197号 (1995年8月) までのご利用はマイクロフィルムとなります。
<請求記号 YA-22 1977年刊までのカラー図版はYA5-1002>



岡倉天心 (1863-1913) らによって創刊された雑誌。日本および東洋における絵画、陶芸、彫刻などの美術作品が、当時の最先端の印刷技術で紹介されている。現在も刊行を続ける。



網目写真版

仕組み

写真のネガを網目のスクリーンを通して亜鉛版や銅版に露光し、網点（現在でいうところのドット）に置き換える。版面に刻まれた網点の大小でモノクロ写真を表現しようとする手法である。スクリーンの線が多い（密である）ほど、画像が精細になる。

由来

スクリーン技術の開発は、欧米において19世紀後半から行われていた。日本でも堀健吉(1856-1934)

や小川一真らによって早い段階から実用化が進められた。堀は写真凸版製版会社である猶興社を創設した。ドットに置き換える原理は現在も使われている。



堀健吉肖像（網目写真版）
『印刷雑誌』 第1巻第1号
明治24（1891）年2月
印刷雑誌社
<請求記号 雑35-250>
p.22

特徴

細かい網点で明暗を表現できるため、写真を簡単に紙に印刷できるようになった。石版に代わり、人物や風景の写真印刷に用いられた。絵葉書や新聞付録にも使われ、好評を博した。

（展示委員会企画展示小委員会）



『日清戦争実記』第3編 明治27（1894）年9月19日 博文館
パノラマ口絵「清國軍港旅順口之全景」
（下は赤枠部分の拡大）
<請求記号 雑53-3>
*館内でデジタル画像を閲覧可能。

日本で初めて網目写真版による写真を掲載した雑誌の一つ
（前号で木口木版の表紙を紹介）。
口絵では、米国で学んだ小川一真の写真製版技術が活かされている。



世界図書館情報会議－第77回国際図書館連盟 (IFLA) 大会 図書館を越える図書館

みんなのための統合、革新、情報



華やかなポスター・セッション会場

2011年8月13日から18日にかけて、「世界図書館情報会議－第77回国際図書館連盟 (IFLA) 大会」

が、プエルトリコ最大の都市サンファンで開催されました。「図書館を越える図書館：みんなのための統合、革新、情報」のテーマのもと、116か国から1,800名以上が参加したこの大会に、国立国会図書館からは、網野光明収集書誌部長（当時）を団長とする代表団7名が参加しました。

IFLAは、1927年に創設された図書館および情報サービスに関する世界最大の組織です。テーマ別に設けられた40以上の分科会や、資料保存、著作権等法律問題といったコア活動などを通じて、世界の図書館界の様々な課題に取り組んでいます。

今大会ではIFLA会長の交代があり、8月18日の閉会式では、パラン新会長（Parent, Ingrid カナダ・ブリティッシュコロンビア大学図書館長）から、「図書館：変化を起こす力（Libraries – a force for change）」を自身のテーマとするとの所信表明がありました。また、8月15日には第38回国立図書館長会議（CDNL）が開催され、自然災害からの復興が話題となりました。

2012年の大会はヘルシンキ（フィンランド）で、2013年の大会はシンガポールで開催される予定です。

（国立国会図書館IFLA サンファン大会派遣団）

電子出版物の法定納本に取り組む

国立図書館

国立図書館長会議、国立図書館分科会

(1) 第38回国立図書館長会議（CDNL）

8月15日に開催された今年の国立図書館長会議（CDNL）には、47か国の国立図書館長（代理を含む）が出席し、国立国会図書館からは館長の代理として網野光明収集書誌部長（当時）が参加しました（筆者が同行）。

会議では、プリンドリー英国図書館長から、昨年のCDNLにおける議論を受けて世界各国の国立図書館を対象に実施した電子出版物の法定納本に関する調査結果の報告があり、電子書籍・ウェブサイトの収集に関する法制化が国際的に進行しつつある状況が浮き彫りとなりました。このほかに、マーカム米国議会図書館副館長から新しい目録規則RDA（Resource Description and Access）の進捗状況、デジタル戦略に関するIFLA・CDNLの合同プロジェクト（ICADS）からICADSの解散に関する報告などが行われました。

「自然災害からの復興」をテーマとする各国報告では、日本からは、国立国会図書館の行っている被災地への支援、地震による被害と災害時に国立図書館が果たすべき役割について報告し、地下書庫の長所や防災計画について質疑がありました。

また、電子出版物の法定納本、デジタル化、リテラシー振興の三つの小グループにわかれて議論が行われ、法定納本のグループには日本を含め、

最も多い参加がありました。このグループの提言をうけてCDNLでは、英国図書館が中心となって、各国立図書館が電子出版物の納本に必要な法制化を自国政府に働きかけていく際に役立つような基礎資料をとりまとめることになりました。前述の国立図書館調査結果、法制に含まれるべき原則、参考事例、政府へのメッセージ等の内容が想定されています。

なお、来年のCDNLを主催するエクホルム フィンランド国立図書館長・IFLA/FAIFE（情報への自由なアクセスと表現の自由に関する委員会）議長から、来年の会合は「表現の自由」と「デジタルに係る権利と国立図書館」をテーマとしたいとの発言がありました。

(2) 国立図書館分科会

18日には国立図書館分科会ほかの主催による、電子出版物の法定納本をテーマとした公開セッションが行われ、15日のCDNLでの議論が紹介されるとともに、フランス¹、ドイツ²、ニュージーランド³、英国⁴等の国立図書館から自国の法制化の現状と課題が報告されました。これらの国は法律レベルではすでに電子出版物の納本についての規定をもっていますが、出版界との合意が難しいなどのため実施に至っていない（英国、フランス）、法令が定められても実施に際し苦労がある（ドイツ）等の状況にあるということです。下位法ができていなくても、試行事業として、あるいは

は発信者の許諾によって、インターネット上の情報の収集を進める国もあります。

CDNL、国立図書館分科会とも、電子出版物の法定納本が主要なテーマになっており、国際的に共有されている課題であることを改めて認識するとともに、同じ課題に取り組んでいる当館にとっても大変参考になりました。

（ローラー ミカ 総務部企画課長）

■ 議会の要望にいかに応えるか

■ 議会のための図書館・調査サービス分科会

(1) プレコンファレンス

議会のための図書館・調査サービス分科会（以下、議会図書館分科会）の第27回プレコンファレンスは、サンフアン島のプエルトリコ議会（写真）において8月12日から15日にかけて開催されました。55の国や地域から約100名が参加しました。

例年より参加者は少なかったものの、中南米諸国からは多くの参加がありました。

会議では、議員から様々な調査依頼への



プエルトリコ議会
(Ross Becker氏撮影)

1 The state of e-legal deposit in France: looking back at five years of putting new legislation into practice and envisioning the future. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/193-stirling-en.pdf>)

2 Managing legal deposit for online publications in Germany. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/193-goempel-en.pdf>)

3 Electronic legal deposit: the New Zealand experience. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/193-elliott-en.pdf>)

4 Tortoise or hare? Learning from the development of e-legal deposit legislation in the UK. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/193-gibby-en.pdf>)

対応について各国の事例の報告があり、ワークショップ等では、各国の議会図書館が直面する様々な課題について、意見交換が行われました。

日本からは、筆者が「国立国会図書館における新たな科学技術調査プロジェクト」⁵と題する報告で、平成22年度から外部の専門家や民間のシンクタンクとの共同調査プロジェクトを開始したことを紹介しました。

各国とも科学技術に関する議員の関心は非常に高く、調査依頼も多いのですが、多様な問題に充分に対応できないことが共通の課題となっています。報告に対しては、外部の専門家の知識を活用した日本のプロジェクトをぜひ参考にしたいとの声が多く寄せられました。

このほか、イギリス下院図書館からは、2010年の政権交代の際に政策課題の解説集を刊行した事例や新規当選議員への対応が紹介され、各国からの関心を集めていました。

(2) IFLA大会

議会図書館分科会は、「議会と市民に情報とサービスを伝達する進化したアプローチ」をテーマとして開催され、カナダ、チリなど6か国からの報告が行われました。米国議会図書館の法律図書館からは、「一つの世界の法律図書館」(One World Law Library: OWLL)というコンセプトに基づいた、国境や時差を越えて誰でも利用可能なデジタル法律図書館の構築を進めている報告がありました。

議会図書館分科会常任委員会では、役員の改選が行われ、プリンガー イギリス下院図書館長が新たな分科会長に選出されました。任期は2年です。

財政状況が厳しい中、いかにして議員の多様な調査要望を的確に把握し、十分に応えてゆくかが、各国の議会図書館にとって大きな課題となっていることを改めて痛感した大会でした。

ひろせ じゅんこ
(廣瀬 淳子 調査及び立法考査局海外立法情報課長)

書誌データを越える書誌データ

書誌分科会

書誌分科会および目録・書誌関連のセッションでは、書誌データとその作成に関わる規則をオープン・アクセスなものとして提供する、という昨年の大会における議論がさらに展開されました。特に印象深いのは、Linked Open Data (LOD) というキーワードです。LODとは、ウェブ上でデータを共有し、関連するデータをつなげていくための仕組みです。このLODを書誌データへ適用する取組みが数多く示されました。

書誌分科会常任委員会では、全国書誌⁶について、2009年に刊行した『デジタル時代の全国書誌』⁷という指針を継続して推進しています。加えて、LODとしての公開推進についても検討していくことになりました。さらに、bibliography (書誌) という語について、ウェブ時代、LODの時代に適した新たな定義を検討すべきではないか



との意見も出ました。

目録・書誌関連のセッションでは、典拠⁸データをLODとして提供することについて、米国議会図書館⁹、ドイツ、スペイン¹⁰から発表がありました。筆者も、LODである「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス (Web NDL Authorities) 開発版」について、書誌分科会で報告し、分類・索引分科会のオープンセッションでペーパー発表を行いました¹¹ (写真)。

典拠データは、図書館が培ってきた、目録を効率よく検索するための仕組みですが、ウェブ上でも活用できる可能性があります。LOD化の取組みが示すように、書誌データは、図書館目録という閉じた枠組みを越えつつあります。大会全体のテーマは「図書館を越える図書館」でしたが、関連するセッションのすべてに、いわば「(閉じた) 書誌データを越える (開かれた) 書誌データ」というテーマが通底しているようでした。

おおしば ただひこ
(大柴 忠彦 収集書誌部収集・書誌調整課)

資料保存その1

デジタルメディアがもたらす可能性と課題 資料保存分科会

(1) サテライトミーティング

貴重書分科会と資料保存コア活動 (PAC) の共催によるサテライトミーティングは、「カリブ海地域諸国の図書館におけるコレクションの構築

とその活用・保存」をテーマに、プエルトリコ美術館¹²で開催されました。カリブ海地域大学図書館協会¹³からは、ハリケーン「カトリーナ」やハイチ、チリで起きた地震等の経験をふまえ、図書館・文書館が災害への備えとして取り組むべきこと、震災アーカイブ等の防災研究の基盤づくりの重要性等、興味深い話題が報告されました。

(2) IFLA 大会

17日に行われた資料保存分科会と視聴覚・マルチメディア分科会共催のセッションでは、情報環境の急速な進展への対応に関連した利用と保存の両側面からの報告が8件ありました。筆者は、平成18年度から進めてきた録音・映像資料のデジタル化に関する調査研究等¹⁴の成果を中心に、国立国会図書館の録音・映像資料の保存の状況を発表しました¹⁵ (次頁写真)。ドイツからは、長期保存のため

5 New Science and Technology Research Project of the National Diet Library, Japan. (http://iflaparl2011.org/en/images/August_13_Papers/2011_IFLA_preconference_paper_Japan.doc)

6 ある国の出版物 (広義にはその国に関する著作やその国の言語で書かれた出版物等を含む) の記録。

7 IFLA Working Group on Guidelines for National Bibliographies, Maja Zumer (ed). National bibliographies in the digital age : guidance and new directions. München : K.G. Saur, 2009

8 図書館目録において検索の手がかりとなる著者名や主題語彙の統一した形等を定めたもの。

9 Linking to LCSH and LCC: controlled subject headings and classification systems through the Web. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/149-tillett-en.pdf>)

10 Data aggregation and dissemination of authority records through Linked Open Data. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/80-agenjo-en.pdf>)

11 A service of the National Diet Library, Japan, to the semantic web community. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/149-tadahiko-en.pdf>)

12 Museo de Arte de Puerto Rico

13 ACURIL: Association of Caribbean University, Research and Institutional Libraries

14 電子情報の長期利用保証に関する調査研究 (http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation_02.html)

15 Preservation of audiovisual collections at the National Diet Library. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/161-okahashi-en.pdf>)



のデジタル化に加えて、音源と楽譜を連動させたデジタルコンテンツの事例が紹介されました。米国の学術図書館からは、録音・映像

の媒体がデジタルに移行したことで、ストリーミング配信等が可能となり利用が増えたものの、定期的なマイグレーション¹⁶が必要であり、その費用の確保等が新たな課題であると報告がありました¹⁷。利用が増えればそれに比例して保存対策も拡大する必要がある、この点を考慮に入れて保存コストを検討するべきとの発言に共感を覚えました。

セッション終了後には他の報告者から東日本大震災へのお見舞いの言葉をかけられ、思いがけない心遣いが身にしみました。

常任委員会の席上では、ハイチにおける被災図書館・文書館の支援活動、動産文化財（美術工芸品等）の保存に関するヨーロッパ規格（EN規格 CEN/TC 346）の動向等が話題となりました。

（岡橋 明子 収集書誌部資料保存課）

資料保存 その2

環境保護と経費削減を考慮した資料保存 IFLA/PAC主催オープン・セッション

地球温暖化防止のため、あらゆる施設において温室効果ガスの排出削減に向けた取り組みが必要とされ、図書館も例外ではありません。8月18日に開催された、IFLA資料保存コア活動（PAC）主

催のオープン・セッションでは、「文化遺産の保存における省エネルギーの課題：環境保護と経費削減のために」をテーマとして、科学的方法を堅持しつつ、環境への影響や大幅な支出削減を考慮し、施設・設備の改善を図る試みが紹介されました。

省エネルギーの取組みについては、フランス国立図書館¹⁸、南アフリカ国立図書館¹⁹から報告がありました。フランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館では、従来書庫内の温度を $18 \pm 1^\circ\text{C}$ 、相対湿度を $55 \pm 5\%$ としていましたが、2008年、夏の温度の上限を 22°C 、相対湿度を50%に下げるという提言がありました。以降、試験を行い、その結果をもとに施設管理部門、資料所管部門、保存部門が検討を重ね、2010年に書庫内の温度と相対湿度を、夏期（4月15日から10月15日まで）は $19 \pm 1^\circ\text{C} \cdot 50 \pm 5\%$ 、冬期は $19 \pm 1^\circ\text{C} \cdot 45 \pm 5\%$ と決めました。加えて、フランス国立文書館の新館（2012～2013年に開館予定）について、外部

日光浴

年中暑い地域だからでしょうか、「涼しいことはよいことだ」とばかりに会議場を冷やすのがプエルトリコの流儀のようです。貴重書分科会・資料保存コア活動PAC共催のサテライトミーティングが行われたプエルトリコ美術館もご多分にもれず、上着を持たずにやってきた参加者は真夏の南国で寒さに震えるはめに。冷え切った体を温めようと休憩時間に屋外で日差しを浴びる参加者にカメラを向けると、レンズが白く曇っていました。節電の日本に思いをめぐらせた午後のひとときでした。



（岡橋）

の影響を遮断するよう窓のほとんどない構造として
いると報告がありました。南アフリカ国立図書館
からは、膨大な冷暖房の経費を削減するため、
2009年の書庫増設にあたり、グリーンビルディ
ングと呼ばれる、環境に配慮した設計方法を採
ったことについて報告がありました。設計の際は、
人間にとっての心地よさも重視されたそうです。
南アフリカでは温湿度の変化が激しく、標準に即
した保管環境を維持することが難しいため、湿度
には注視するが、そのほかの条件については実施
可能な範囲で検討していくとのことでした。

米国の画像保存研究所²⁰からは、図書館にお
ける省エネルギーの可能性についての調査結果
が報告されました²¹。この調査では、地域、館
種、書庫の構造等が異なる5機関（イェール大学、
UCLA、ニューヨーク公共図書館、コーネル大学、
バーミングハム公共図書館）において、閉館後の
7時間から10時間、書庫の一部で空調の運転を停
止する実験を1か月間行いました。実験では、資
料への影響はほとんどみられず、さらに空調の費
用も抑えられたとのことでした。省エネルギーと
保存の両立には、資料所管部門、施設管理部門、
総務部門の間の協力が何より大切であるという発
言もありました。

このほか、パナマ国立文書館において、イタリ
アの民間の保存研究機関との協力により、紙を劣
化させる微生物を熱・冷凍処理によって従来より
も短い48時間で95%取り除く機器を導入したと

いう報告がありました²²。

省エネルギーという地球的課題については、今
後も国際的な保存協力の場合において情報を共有
し、解決策を見つけるよう、私たちが努力してい
きたいと思います。

（中村 規子 収集書誌部司書監）

「私たちはデジタル移民ね……」

児童・ヤングアダルト図書館分科会

デジタルネイティブという言葉は世の中でよく
目にしますが、その対語としての「デジタル移民
(digital immigrant)」は、ややなじみが薄いので
はないでしょうか。冒頭の一言は、児童・ヤング
アダルト図書館分科会（以下、児童YA分科会）
常任委員会会議で、デジタルネイティブの子ども
たちに対応するにはどういう力が必要か？につい
て話し合っていたときのある委員のつぶやきです。

紙の本、肉声での対面サービスに長年携わって
きた「移民」たちは、デジタル世界では不自由や

16 利用を保障するための媒体変換。

17 Drawing a fine line between promoting use and preserving access to new media. (<http://conference.ifla.org/past/ifla77/161-laskowski-en.pdf>)

18 How to conciliate long-term preservation, sustainable development and energy savings in stores already-existing or under construction: experiences and projects of the Bibliothèque nationale de France and the Archives nationales de France. (http://www.ifla.org/files/pac/conferences/PPT_Vallas.pdf)

19 Cultural heritage preservation planning against economic and environmental challenges. (http://www.ifla.org/files/pac/conferences/IFLA_2011_DRIFHOUT.pdf)

20 Image Permanence Institute 米国ロチェスター工科大学に属し、写真をはじめとする文化遺産の保存に関する研究、情報提供、コンサルティング・サービスなどを行う研究機関。

21 Research on energy savings opportunities in libraries. (http://www.ifla.org/files/pac/conferences/IFLA_LINDEN.pdf)

22 Setting up a pilot project for a laboratory in conservation and preservation in Panama City. (<http://www.ifla.org/files/pac/conferences/fratielivi%20IFLA%202011.pdf>)

苦労が多いのです。会議では、昔話の語りやわらべうたなど従来の児童サービスで重視されていた要素の比重が軽くなってきている、デジタル媒体を使ったサービスが求められるようになってい、などの状況が各地の委員から口々に報告されました。そこで、来年の大会のオープンセッションでは、「児童図書館員の研修：子どもに対応するために必要なスキルとは？」をテーマとする方向で検討が進んでいます。

おっと、話が先走りすぎました。来年の計画ではなく、今年の報告に戻しましょう。

(1) 「絵本で世界を知ろう」プロジェクト

このプロジェクトは、子どもたちが絵本を通じて外国の言語・文化に触れることができるような国際的な絵本リストを作ろうという趣旨で、昨年夏の児童YA分科会常任委員会で発案され、スタートしました。各国の図書館員が、図書館で子どもによく読み聞かせたり、子どもと一緒に読んだりする、その国の代表的な絵本を10冊選んで、絵本リストを作ります。

当初の目標は、各国から集まったリストをIFLAのサイトに掲載することでした。ところが1年の間に夢はふくらみ、今年の常任委員会では、リストに掲載する絵本の現物を集めて展示会もしよう！と話が大きくなりました。また、国際的な子どもの本の専門団体であるIBBY（国際児童図書評議会）とIFLA読書・リテラシー分科会から

協力の申し出があり、両者ととも、2012年夏のIFLAヘルシンキ大会とIBBYロンドン大会での展示会開催を目指すことになりました。

(2) オフサイトセッション

今回児童YA分科会では、会場内で三つのセッションを開きましたが、そのほ



かにサンファン旧市街の小学校の図書室（写真）を会場としたオフサイトセッションも行い、地元で児童書や子どもの読書に関わる人たちから、「プエルトリコの児童図書館と児童書」というテーマで事例報告がありました。プエルトリコでは家庭で本を買って読書をする習慣がなく、子どもは学校に入って初めて読むことを体験するそうです。初めての読書＝勉強であり、勉強がわからないと読書も苦痛になる。そんな環境でも読むことを好きになってもらえるように、読む力をつけてもらえるように、学校図書館に携わる人々や児童書の作家が奮闘しています。物語の登場人物の扮装をして読書をする、図書館クラブでデジタルツールを使ってみんなで絵本を作る、児童書の作家が学校訪問をして一緒に物語を作るなど、デジタル・アナログ取り混ぜた様々な活動の様子を聞くことができました。

こばやし なおこ
(小林 直子 国際子ども図書館児童サービス課長)

言葉のエッセイ

第11回 特定か不特定か

英語の学習で厄介なことの一つに、不定冠詞と定冠詞の使い分けがあるだろう。多くのヨーロッパの言語では、名詞が特定されているか特定されていないかを重視して冠詞を使い分けており、非常に面倒である。しかも、言語によって使い方が微妙に違うところが困ったものである。ドイツ語の場合、「私は学生です」と属性を名乗るとき、不定冠詞は不要で、「Ich bin Student」という。

英語では、不定冠詞は「a」であるが、「a」は、ポルトガル語とハンガリー語では定冠詞なのでややこしい。ポルトガル語の場合は、「a」は女性単数の定冠詞で、英語と違って、固有名詞にも使う。「パウラ」さんは「a Paula」である。現代ギリシャ語でも固有名詞に定冠詞をくっつける。

冠詞をつける、つけないだけでなく、動詞の変化形にまで影響するのがハンガリー語である。ハンガリー語では、目的語が特定されているか、特定されていないかで、動詞の変化が異なるということは、第2回ですでに述べた。

ベルシャ語には、冠詞はないが、目的語が特定されていることを示す場合には、目的語の後ろに「r」(ラー)」という後置詞をつける。「彼は本を読んだ」は、「او کتاب خواند」(ウー・クターブ・ハートド)」だが、「彼はあの本を読んだ」は、「او ان کتاب را خواند」(ウー・アーン・クターブ・ラー・ハートド)」となる。

ヨーロッパ系の言葉でも、スラヴ系諸語の言

葉には、たいてい冠詞はない。そこで大喜びで、ポーランド語で「私は日本人です」と言おうとして、「Jestem Japończyk」と言ったら、これも間違いである。こういう場合、ポーランド語では、属性は造格で表さなければならない。正しくは、「Jestem Japończykiem」である。では、「AはBである」という文でも、AとBがイコールで入れ替え可能な場合は、AとBのどちらを主格に、どちらを造格にすべきか。こういう場合、造格をとるのは、より広い概念のほうである。例えば、「ポーランドの首都はワルシャワです」という場合、「ワルシャワ」が主格、「首都」が造格になる。

「私は～です」と言う場合、スペイン語とポルトガル語では、英語のbe動詞に当たる動詞が一つではないことに注意が必要である。変わらない性質(例えば「日本人である」)を表す場合には、動詞は「ser」を使うが、一時的な状態(例えば「疲れている」)などを表す場合には、「estar」を使う。

話を冠詞に戻そう。冠詞などなくても、日本語や中国語のように問題なくやり過ごせるのだから、冠詞のないスラヴ系諸語万歳と言いたいところであるが、スラヴ系諸語でも格変化のないブルガリア語(第10回参照)がここでも例外として立ちはだかる。ブルガリア語の場合は、英語のように名詞の前に冠詞をつけるのではなく、名詞の語尾に冠詞がつく。この辺は、北欧の言語に近いところが面白い。

(ゴガク・マニアシュヴィリ)



این نان را می خورم
(私はこのナンを食べます)

である。変わらない性質(例えば「日本人である」)を表す場合には、動詞は「ser」を使う

うが、一時的な状態(例えば「疲れている」)などを表す場合には、「estar」を使う。

話を冠詞に戻そう。冠詞などなくても、日本語や中国語のように問題なくやり過ごせるのだから、冠詞のないスラヴ系諸語万歳と言いたいところであるが、スラヴ系諸語でも格変化のないブルガリア語(第10回参照)がここでも例外として立ちはだかる。ブルガリア語の場合は、英語のように名詞の前に冠詞をつけるのではなく、名詞の語尾に冠詞がつく。この辺は、北欧の言語に近いところが面白い。

(ゴガク・マニアシュヴィリ)

本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

千代田の幕末 150年前の世相と文化 平成22年度特別展

千代田区立四番町歴史民俗資料館編・刊
2010.10 51,7頁 30cm <請求記号 GC67-J234>

本書は、東京都千代田区の四番町歴史民俗資料館で平成22年10月4日から11月14日に行われた同名の特別展の展示図録である。幕末である万延・文久年間の千代田区という限定的なテーマで、60ページに満たない厚さではあるが、内容は充実している。

興味深いのは、三代歌川豊国の遺作「錦昇堂版役者大首絵」（大首絵）の未刊行の版がすべて収録されていることである。三代豊国は、「豊国にかほ（顔）、国芳むしや（武者）、広重めいしよ（名所）」といわれるほど似顔絵が得意であった。その死に際して寄せられた仮名垣魯文の追悼文には「役者似貌に、専ら密なる癖を画き分け、精神頗画中にこもり、其人をして目前に見るが如く」と書かれている。「大首絵」は、当時の人気歌舞伎役者の当たり役を描いたもので、通常の浮世絵よりも手間をかけ、高級紙を用い、贅沢に仕上げたものとして評判であった。豊国が亡くなったことで制作が中断されたが、未刊行の絵が存在することが知られていた。この下絵が、豊国のパトロンであった神田塗師町の銅鉄商・紀伊国屋三谷家に残されており、四番町歴史民俗資料館に寄託されたという。下絵であるため、どれも彩色は少ないが、画面いっぱいに描かれた役者の顔は、それぞれ非常に個性的で、晩年の豊国の面目躍如といえよう。今後の研究が待たれる。

このほか、現在の千代田区内で起こった桜田門

外の変、坂下門外の変などの著名な事件や、麻疹の流行や千代田稲荷の興隆、豊島町の幽霊話に山王祭といった江戸末期の庶民の世相や文化が、歴史資料に基づいて丁寧に紹介されている。特に、

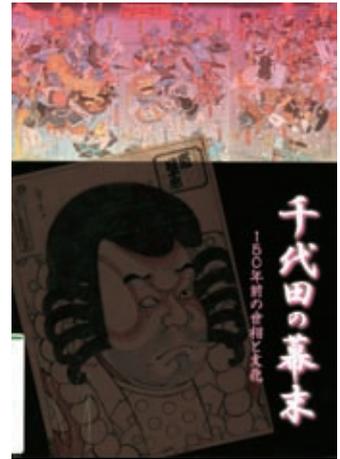
浪士組（新撰組の前身）を発案した庄内藩の武士清河八郎が、幕府から追われることになったとされる町人無礼討の真相を、資料を丹念に追って解明していく様子は、歴史のミステリーを垣間見るようで面白い。

展示図録ではあるが、歴史研究とは、資料を地道に発掘し、整理して、丹念に読み解いていくことだと再確認させられる本である。

なお、四番町歴史民俗資料館は、平成23年11月の千代田区立日比谷図書文化館（旧東京都立日比谷図書館）リニューアルオープンに伴い、同館内に移転した。図書館と連携することで、文化資源の収集・保存とそれらにまつわる千代田区の実践がさらに活発に行われることを期待している。

（総務部人事課 ^{まつなが}松永 しのぶ）

* 1部200円で入手可能（送料別）。送料等の問い合わせは、千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室（03（3502）3348）へ。



東京書籍百年史

東京書籍編・刊

〒114-8524 北区堀船2-17-1

2010.9 412,135頁 31cm

<請求記号 UE57-J57>

「本を読む習慣がない」という人も、教科書は必ず読んだことがあるはず。新しい教科書を手にしたときの、新学期への期待と不安が入り混じった気持ちを思い出す人も多かろう。

教科書は、教育や印刷環境の変遷とも深く関わっている。本書は、教科書の発行を中心とした出版社である東京書籍の会社史というだけでなく、明治から平成の教育史、教科書政策史として読むこともできる。また、日本紙と西洋紙の違い、“サイタサイタサクラガサイタ”で有名な「サクラ読本」(『小学国語読本』)が国定教科書として初めての色刷りだったことなどにも触れており、印刷史の参考資料としても有用である。創業百周年を記念して刊行された社史は、本書と写真・動画を中心とする『東京書籍100年のあゆみ』(DVD付き) <請求記号 YU9-J591>の2冊からなる。なお、東京書籍の社史は、これまで4回刊行されている。

日本の近代学校教育制度は、1872(明治5)年、明治新政府により「学制」が公布されたことに始まる。学制公布直後の教科書は自由発行制であったが、何度かの制度改革と、小学校の教科書をめぐると教科書疑獄事件による検定制度の崩壊を経て、国定制度が確立された。国定制度のもとでは文部省が教科書を作成し、その翻刻発行および配布は民間に委ねられた。国定教科書の翻刻発行が許可されたのは、日

本書籍株式会社、東京書籍株式会社、大阪書籍株式会社の3社、許可された科目は、修身、国語、歴史、地理、算術、図画の6種であった。

教科書は、その時々
の世情を映し出している。本書では、大正デ

モクラシーが新しい世界の潮流になると、児童の自由活動などを重んじる新教育の教育思想が反映され、満洲事変以後は軍国主義への傾斜が強まったこと、「墨塗り教科書」に始まった戦後は、学習指導要領と教科書検定制度が確立され、検定教科書の発行が開始されたこと、教科書や教科書検定が政治問題化した高度経済成長期、ゆとり志向が強まった1970年代、新たな情報機器が登場し、学習教材が多様化した1980年代、バブルが崩壊し、いわゆるPISAショックを受けた1990年代と、教科書をめぐる話題が順を追って解説されている。

1909(明治42)年、国定教科書の翻刻発行会社として誕生した東京書籍は、現在では、一般書の出版、教育・教養のためのソフトウェア開発、学力調査等の評価事業、日本語検定等にまで事業領域を拡大している。近い将来、デジタル化された教科書や教材を使って授業を行うことが当たり前になるのかもしれない。媒体が変わっても、新学期の初めに新しい教科書を広げたときのワクワク感は、これからも変わらないままであってほしいと願う。

(利用者サービス部科学技術・経済課 松井 美樹)



■ 新副館長就任



平成23年12月12日付けで田屋裕之が国立国会図書館副館長に任命された。

■ 韓国国立中央図書館との第14回業務交流

10月24日～31日、韓国国立中央図書館（ソウル）において標記業務交流が行われ、川鍋道子収集書誌部資料保存課長ほか計3名からなる代表団が訪韓した。

両図書館のこの1年の取組みと今後の課題、「政策情報支援サービスと政府機関図書館との協力」および「古典籍資料の収集保存と利用提供」をテーマとする報告がなされ、活発な意見交換が行われた。

■ 法規の制定

【告示第2号】国立国会図書館法第二十五条の規定により納入する出版物の代償金額に関する件の一部を改正する件

（平成23年10月12日制定）

平成23年7月29日付け納本制度審議会答申において、納入の一括代行事務に要する金額は、納入資料1点につき150円以上170円以下の範囲とすることが適当であるとされたことを受け、そのように規定を整備した。平成23年10月12日から施行された。

この法規による改正後の国立国会図書館法第二十五条の規定により納入する出版物の代償金額に関する件（昭和50年国立国会図書館告示第1号）は、国立国会図書館ホームページ>国立国会図書館について>関係法規（<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws.html>）に掲載されている。

お知らせ

■ 新しい「全国書誌」

日本の出版物の記録である「全国書誌」は、平成24年1月以降、NDL-OPACの「書誌情報提供サービス」画面から提供します。



書誌情報提供サービス画面（予定）

「図書」「非図書」「逐次刊行物」「すべて」のいずれかを選択し、日付を指定すると、その日に国立国会図書館で整理が終了した出版物の書誌データが表示されます。



一覧表示画面（予定）

表示された書誌データをタイトルなどの項目で並べ替えることも可能です。

データ1件ごとや、複数件まとめてJAPAN/MARC MARC21フォーマット形式、記号区切りのテキスト形式、引用形式などでダウンロードすることができます。

*データの利用には申請が必要な場合があります。詳細は、国立国会図書館ホームページ「書誌情報提供サービスについて」に掲載予定です。

なお、「全国書誌」の機械可読版であるJAPAN/MARCは、これまでどおり社団法人日本図書館協会を通じて頒布します。

○お問い合わせ先 国立国会図書館 収集書誌部 収集・書誌調整課

電話 03 (3581) 2331 内線24506



お知らせ

■ 国際政策セミナー 「世界経済の動向と 日本の成長戦略」

調査及び立法考査局の総合調査プロジェクト「技術と文化による日本の再生」(仮題)の一環として、「世界経済の動向と日本の成長戦略—東日本大震災後の課題—」をテーマに国際政策セミナーを開催します。講師は、国際貿易、グローバルイノベーション等を専門とし、数多くの政府、国際機関で政策コンサルタントを務める気鋭の国際経済学者リチャード・ボールドウィン氏です。

このセミナーでは、ボールドウィン氏による基調講演の後、国内の専門家を交え、パネルディスカッションを行います。同時通訳付き、入場は無料です。研究者の方々、広く日本経済の今後に関心をお持ちの皆様のご参加をお待ちしております。

○日 時 平成24年1月27日(金) 14:00～17:00

○会 場 東京本館 新館講堂(定員300名)

○プログラム

基調講演 リチャード・ボールドウィン氏

(ジュネーブ高等国際問題・開発研究所国際経済学教授)

パネルディスカッション

コーディネーター 戸堂康之氏(東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻教授、国立国会図書館客員調査員)

パネリスト 渡邊頼純氏(慶応義塾大学総合政策学部教授)

服部聡之氏(株式会社エンビズテック代表)

山口広文(専門調査員、調査及び立法考査局総合調査室主任)

○お申込方法

ホームページの参加申込みフォームから平成24年1月20日(金)までにお申し込みください。定員に達した時点で受付を終了します。

国立国会図書館ホームページ(<http://www.ndl.go.jp/>)>イベント・展示会情報
URL <http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/ipsjapan2011.html>

または、次の事項を明記の上、FAXでお申し込みください。①講演会名(国際政策セミナーとお書きください)、②氏名(ふりがな)、③所属機関等、
④電話またはFAX番号

○お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館 調査及び立法考査局 調査企画課(担当:安部・本田・植木)

FAX 03(3581)2603 電話 03(3581)2331(代表)



お知らせ

■ 国際子ども図書館講演会 「谷川俊太郎さんに聞く 一詩は絵本、絵本は詩一」

国際子ども図書館は、展示会「日本の子どもの文学－国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」の中で、詩人谷川俊太郎氏の作品と業績を紹介するコーナーを設けます（平成24年2月14日～8月19日）。

展示にあわせて、谷川俊太郎氏をお招きし、展示会監修者の宮川健郎氏を聞き手として、講演会「谷川俊太郎さんに聞く一詩は絵本、絵本は詩一」を行います。入場は無料です。

○日 時 平成24年2月18日（土）14:00～16:00（予定）

○会 場 国際子ども図書館 ホール（3階）

○講 師 谷川俊太郎氏（詩人）
宮川健郎氏（武蔵野大学教授）

○対 象 中学生以上（定員100名）

○お申込方法

平成24年1月11日（水）から2月3日（金）までに、次のいずれかの方法で、参加者1名につき1通に、①氏名（ふりがな）、②年齢、③郵便番号・住所、④電話番号をご記入の上お申し込みください（必着）。申込多数の場合は抽選となります。

[往復はがき] 〒110-0007 台東区上野公園12-49 「2月18日講演会」係
(返信用はがきに返信先の郵便番号、住所、氏名をお書きください)

[電子メール] nkb0218@kodomo.go.jp

(タイトル・件名欄に「2月18日講演会申込み」とお書きください)

○お問い合わせ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課

電話 03 (3827) 2053 (代表)



お知らせ

■ 平成23年度 児童サービス 協力フォーラム

国際子ども図書館は、都道府県立図書館による児童サービスのあり方についての意見交換・相互交流の場を設け、関係者間の連携・協力を促進するため、第2回「児童サービス協力フォーラム」を開催します。

今回は「公共図書館による学校・学校図書館に対する学習支援」をテーマとして、都道府県立図書館が実施する児童サービス支援活動の諸課題について、事例発表と全体ディスカッションによる情報交換を行います。現状認識を深めるとともに、課題を整理し、さらなる向上のためのヒントを探ります。なお、このフォーラムは、平成22年度から3年間開催する予定です。

- 日 時 平成24年3月12日（月） 13:00～16:00
- 会 場 国際子ども図書館 ホール（3階）
- 対 象 公共図書館の児童サービス担当者、学校支援担当者等。
- 定 員 80名。申込多数の場合は調整します。
- 参加費 無料。ただし、旅費等は参加者の負担とします。
- お申込方法

次の事項を記載の上、平成24年1月11日（水）までに電子メールでお申し込みください（必着）。①お名前（ふりがな）、②ご所属、③電話番号（緊急時の連絡用）、④閉会後の国際子ども図書館見学希望の有無

*お申込みの際、ご所属の機関で行っている学習支援活動の概要や課題などを簡単に教えてください。ディスカッションの参考とさせていただきます。

*参加の可否は、1月中旬に通知します。

*電子メールでのお申込みができない場合はご相談ください。

- お申込み・お問い合わせ先

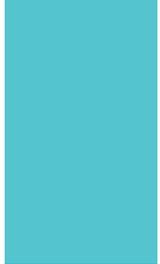
国立国会図書館 国際子ども図書館 児童サービス課 企画推進係
電子メール ml-kisui@ndl.go.jp 電話 03 (3827) 2053（代表）

※フォーラムの詳細は、ホームページをご覧ください。

国際子ども図書館ホームページ（<http://www.kodomo.go.jp/>）

研修・交流＞関連機関との連携協力＞児童サービス協力フォーラム
＞平成23年度児童サービス協力フォーラム

URL <http://www.kodomo.go.jp/study/cooperation/forum/2012.html>



お知らせ

■ 平成23年度 アジア情報研修

日本国内の図書館員等を対象に、アジア情報に関するサービスの向上を図ることを目的として、平成23年度アジア情報研修を実施します。

- 日 時 平成24年2月15日（水）、16日（木）
- 会 場 関西館 第1研修室
- 対 象 大学図書館、専門図書館および公共図書館または研究機関等の職員で、原則として業務においてアジアに関連する情報を扱う方。
- 定 員 30名。応募多数の場合は調整します。
- 日 程

第1日：2月15日（水） 13:30～17:40

13:40 「アジア情報の調べ方ー国立国会図書館サーチ、新NDL-OPACを中心に」
アジア情報課職員

15:10 「上海新華書店旧蔵書についてー連環画を中心に」
中野徹氏（近畿大学文芸学部講師）

16:50 アジア情報室・書庫見学

*第1日目終了後、18:00から19:00まで、懇親会を予定しています。

第2日：2月16日（木） 10:00～15:50

10:00 「現代タイ情報の調べ方ー所蔵と入手方法」

増田真氏（大阪大学外国語学部非常勤講師、国立国会図書館非常勤調査員）

13:00 「仏教典籍（漢文資料）の調べ方」

會谷佳光氏（東洋文庫図書部資料整理課長兼閲覧複写課長、研究員）

15:10 意見交換・修了証書授与式

*演題はいずれも仮題です。

- 参加費 無料。ただし旅費・滞在費等は受講者の負担とします。
- お申込方法
平成24年1月25日（水）までに、電子メール（またはFAX）で、①氏名（ふりがな）、②所属機関、所在地、③所属部署・職名、④電話番号（日中のご連絡先）、⑤電子メールアドレス（またはFAX番号）をご記入の上お申し込みください（必着）。
タイトル・件名欄に「アジア情報研修申込み」とお書きください。
*受講の可否は平成24年1月27日（金）までにお知らせします。
- お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館 関西館 アジア情報課

電子メール k-azia@ndl.go.jp FAX 0774 (94) 9115

電話 0774 (98) 1371（直通）

お知らせ

■ 本の万華鏡（第8回） 「津波—記録と文学—」



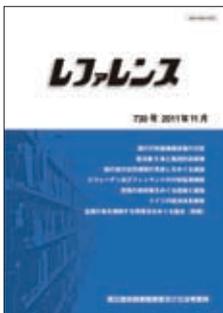
「更生の郷土建設へ」（ポスター）
宮城県 [1933]
室谷精四郎編『宮城県昭和震嘯誌』
（宮城県 1935）巻頭写真から

3月11日の東日本大震災では、津波によって大きな被害がありました。このように、古来、日本の沿岸には津波が数多く来襲し、各地に大きな被害をもたらしました。災害の中で人々はその苦難を乗り越えて、津波の恐ろしさや被害を後世に伝え、子孫を津波から守り、被害軽減を図るために多くの記録を残してきました。

11月16日から提供を開始したミニ電子展示会「本の万華鏡」第8回では、国立国会図書館の蔵書の中から津波災害の記録資料をご紹介します。また、津波を題材とした文学作品もいくつか取り上げています。第1章では、津波災害にあたり、国や地方自治体で刊行した被害調査や救援活動の記録資料の中から、明治29年三陸地震津波と昭和8年三陸沖地震の記録をご紹介します。第2章では、正岡子規やラフカディオ・ハーンといった文学者たちが残した、津波災害をテーマとした物語や随筆などの文学作品をご覧ください。

○URL <http://rnavi.ndl.go.jp/kaleido/>

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 730号 A4 142頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・ 国の行政組織編成権の分配
- ・ 憲法第9条と集団的自衛権
- ・ 国の地方出先機関の見直しをめぐる議論
- ・ スウェーデン及びフィンランドの行政監視機関
- ・ 英国の核政策をめぐる経緯と議論
- ・ ドイツの経済成長戦略
- ・ 盗撮行為を規制する刑事法をめぐる論点（短報）

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 03(3523)0812

国立国会図書館の風景 建築50年 東京本館	(井田 敦彦)	607 ⑩ : 19-28
国立国会図書館の平成23年度予算	(総務部会計課)	601 ④ : 20-21
国立国会図書館の和図書	(鈴木 宏宗)	600 ③ : 20-29
古典籍の世界へ	(間島 由美子)	598 ① : 14-25
子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く！ 国際子ども図書館第2次基本計画の策定 (国際子ども図書館企画協力課)		602 ⑤ : 18-23
この人を知る 大久保利謙	(藤本 守)	606 ⑨ : 17-19
新春対談 日本の文化力再発見	(澄川 喜一、長尾 真)	586 ① : 4-11
新年のごあいさつ 今年の課題	(長尾 真)	598 ① : 36
数字で見る国立国会図書館 『国立国会図書館年報 平成22年度』から	(総務部総務課)	607 ⑩ : 16-17
誰もがアクセスできるアーカイブをめざして プリュースター・ケール氏の講演から (総務部支部図書館・協力課)		608 ⑪ : 16-19
地域の歴史を知るためのデジタルアーカイブ 公共図書館の取り組みから	(関西館電子図書館課)	603 ⑥ : 4-11
中国国家図書館の国家機関へのサービス	(第29回日中業務交流代表団)	604/605 ⑦⑧ : 22-26
テラコヤ(寺子屋)「日本」を発信した長谷川武次郎の出版	(大塚 奈奈絵)	604/605 ⑦⑧ : 4-17
電子展示会「江戸の数学」	(展示委員会電子展示小委員会)	609 ⑫ : 4-8
特集 雑誌探訪		599 ② : 4-20
国立国会図書館の雑誌	(資料提供部)	599 ② : 14-20
雑誌をめぐる座談会 探して、見つけて、また探す	(栗原 裕一郎、柴野 京子、南陀楼 綾繁)	599 ② : 5-13
図書館・文書館における資料防災	(収集書誌部資料保存課)	603 ⑥ : 14-19
図書館の復興とその支援 大震災を越えて (利用者サービス部サービス企画課、収集書誌部資料保存課、総務部支部図書館・協力課)		607 ⑩ : 4-11
図書館を越える図書館 みんなのための統合、革新、情報 世界図書館情報会議-第77回国際図書館連盟(IFLA)大会 (国立国会図書館IFLA サンフアン大会派遣団)		609 ⑫ : 14-20
日本の子どもの文学 国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み (国際子ども図書館「日本の子どもの文学」展示班)		602 ⑤ : 11-17
日本の「出版物」を集める 納本制度とその先へ	(収集書誌部)	602 ⑤ : 9
納本制度と私	(永江 朗)	602 ⑤ : 4-9
東日本大震災の影響について		601 ④ : 32
フランス、カナダでの資料保存に関する研修を終えて	(村上 直子)	601 ④ : 8-15
平成22年度の国立国会図書館 活動実績評価報告	(総務部企画課)	604/605 ⑦⑧ : 28-33
平成23年度の組織の再編	(総務部企画課)	607 ⑩ : 12-15
本とは何か ロジェ・シャルチエ氏の講演から	(総務部支部図書館・協力課)	601 ④ : 4-7
本の歴史をたどる本 西洋の目録・書誌コレクションから	(折田 洋晴)	600 ③ : 4-12



図解 国立国会図書館のしごと

ISSN (国際標準逐次刊行物番号)

(収集書誌部逐次刊行物・特別資料課)

599 ② : 22-23

言葉のエッセイ

第1回 表記と発音	598 ① : 12
第2回 動詞のいろいろ	599 ② : 24
第3回 人称	600 ③ : 13
第4回 固有名詞	601 ④ : 16
第5回 辞書の引き方	602 ⑤ : 24
第6回 母音・イントネーション・アクセント	603 ⑥ : 13
第7回 濁るか濁らないか	604/605 ⑦⑧ : 34
第8回 外国語を日本語でどう表記するか	606 ⑨ : 23
第9回 異物の同化	607 ⑩ : 29
第10回 格変化	608 ⑪ : 24
第11回 特定か不特定か	609 ⑫ : 21

企画展示「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」から 近代の印刷技術

1 金属凸版、木口木版	(展示委員会企画展示小委員会)	608 ⑪ : 20-23
2 平版(石版)・多色平版(石版)、コロタイプ、網目写真版	(展示委員会企画展示小委員会)	609 ⑫ : 10-13

本屋にない本

納本制度により収集した出版物の中から、主に取次店を通らず入手しにくい国内出版物を紹介。本誌創刊以来の連載。

『アイヌ民族もんよう集 刺しゅうの刺し方・裁ち方の世界』	(金井 ゆき)	602 ⑤ : 27
『アニメーター労働白書 2009』	(服部 恵久)	602 ⑤ : 26
『浮世絵の死角 板橋区立美術館30周年記念特別展 イタリア・ボローニャ秘蔵浮世絵名品展』	(藤田 壮介)	602 ⑤ : 25
『映像アーカイブのノート』	(松永 しのぶ)	598 ① : 26
『実録!“漫画少年”誌 昭和の名編集者・加藤謙一伝 平成21年度特別展』	(西谷 朋子)	600 ③ : 32
『ジャンルコードと分類法 同人誌図書館における分類法の検討』	(小林 昌樹)	603 ⑥ : 27
『新発見・豊臣期大坂図屏風』	(中嶋 恵子)	599 ② : 27
『摺る 播鉢からみえる中世の社会 備前歴史フォーラム資料集』	(砂田 篤子)	608 ⑪ : 25
『臺風雑記 百年前の台湾風俗 2009 ILCAA』	(福山 潤三)	601 ④ : 23
『千代田の幕末 150年前の世相と文化 平成22年度特別展』	(松永 しのぶ)	609 ⑫ : 22
『東京書籍百年史』	(松井 美樹)	609 ⑫ : 23
『名古屋400年のあゆみ Nagoya1610-2010 開府400年記念特別展』	(佐藤 良)	604/605 ⑦⑧ : 35
『新潟県中越地震と史料保存 (1) 長岡市立中央図書館文書資料室の試み』	(大和田 孝志)	599 ② : 25
『日本のふるさと野菜』	(中澤 貴明)	599 ② : 26
『縫針読本』	(吉井 伶奈)	603 ⑥ : 26
『ブリキとトタンとブリキ屋さん』	(伊藤 直美)	608 ⑪ : 26
『文化財たちの「復興」 博物館がみた新潟県中越沖地震 平成22年度夏季特別展』	(村本 聡子)	607 ⑩ : 30
『窓と扉 窓と扉の向こうにある平和と幸福のために』	(井田 敦彦)	606 ⑨ : 29
『三河島と日本初下水処理施設 平成21年度荒川ふるさと文化館第2回企画展』	(大塚 路子)	601 ④ : 22

『ムカサリ絵馬』展 描かれた死者の結婚式	(吉村 風)	606 ⑨ : 28
『横浜・関東大震災の記憶 報告書』	(太田 かおる)	607 ⑩ : 31
『読売巨人軍75年史』	(吉本 紀)	600 ③ : 31



館内スコープ

館内の様々な業務を担当職員が紹介するコラム。

ホームページとすずす日々	(電子情報企画室)	598 ① : 13
雑誌記事索引 1千万の記事・論文へつながる道	(逐次刊行物・特別資料課)	599 ② : 21
レファレンス協同データベースをご存知ですか?	(図書館協力課協力ネットワーク係)	600 ③ : 30
所蔵するすべての雑誌にバーコードを	(雑誌課雑誌第二係)	601 ④ : 17
納本制度+α	(収集・書誌調整課収集企画係)	602 ⑤ : 10
デジタルアーカイブへの入り口「PORTA」	(関西館電子図書館課)	603 ⑥ : 12
『びぶろす』 支部図書館制度とともに	(支部図書館・協力課サービス係)	604/605 ⑦⑧ : 27
君の名は	(総務課法規係)	606 ⑨ : 16
デジタル化事業のアナログな苦勞	(総務部企画課)	607 ⑩ : 18
データベースの維持管理 国会会議録・日本法令索引篇	(議会官庁資料課立法情報係)	608 ⑪ : 15
東京本館 本館は50歳!	(総務部管理課)	609 ⑫ : 9



N D L News 当館の最近の動き

おもな人事	599 ② : 28 601 ④ : 25-26 604/605 ⑦⑧ : 39 606 ⑨ : 30 607 ⑩ : 33
韓国国立中央図書館との第14回業務交流	609 ⑫ : 24
新副館長就任	609 ⑫ : 24
第7回レファレンス協同データベースフォーラム	601 ④ : 25
第9回納本制度審議会代償金部会	606 ⑨ : 30
第18回総合目録ネットワーク事業フォーラム	601 ④ : 24
第20回納本制度審議会および第8回納本制度審議会代償金部会	604/605 ⑦⑧ : 36
第21回納本制度審議会	607 ⑩ : 32
第52回科学技術関係資料整備審議会	599 ② : 28
「第三期科学技術情報整備基本計画」の策定	602 ⑤ : 28
中国国家図書館との第29回業務交流	598 ① : 27
天皇后陛下の行幸啓	600 ③ : 33
東京本館で新たな書を展示	599 ② : 29
東京本館に書を展示	600 ③ : 33
ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所との東日本大震災に関するデジタルアーカイブ共同事業協定	606 ⑨ : 30
平成22年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会	598 ① : 27
平成22年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会	598 ① : 27-28
平成22年度児童書総合目録事業運営会議	601 ④ : 24

平成22年度書誌調整連絡会議	598 ① : 28
平成23年度国際子ども図書館連絡会議	604/605(7)(8) : 37
平成23年度国立国会図書館長と都道府県立及び政令指定都市立図書館長との懇談会	604/605(7)(8) : 37
法規の制定	598 ① : 28 599 ② : 29 602 ⑤ : 28 604/605(7)(8) : 38-39 608 ⑪ : 27 609 ⑫ : 24
我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定	603 ⑥ : 28



お知らせ

アジア言語OPACにインドネシア語・マレーシア語図書の書誌データを追加しました	608 ⑪ : 31
新しい「全国書誌」	609 ⑫ : 25
インターネット上の貴重書等が使いやすくなりました	601 ④ : 27
絵本ギャラリーで『幼年画報』の掲載作品が検索できるようになりました	602 ⑤ : 31
関西館小展示（第7回）「テレビジョンーアナログからデジタルへー」	598 ① : 33
関西館小展示（第8回）「書物にみる辛亥革命」	602 ⑤ : 34
関西館小展示（第9回）「日本人と英語」	604/605(7)(8) : 42
関西館小展示（第10回）「鉄道旅あんない」	607 ⑩ : 36
近代デジタルライブラリーがさらに充実しました	603 ⑥ : 29
近代デジタルライブラリーで児童書も利用できます	598 ① : 29
国際子ども図書館講演会「占領期の児童図書：プランゲ文庫児童書コレクション」	607 ⑩ : 38
国際子ども図書館講演会「谷川俊太郎さんに聞くー詩は絵本、絵本は詩ー」	609 ⑫ : 27
国際子ども図書館講演会「日本の子どもの文学ー昨日・今日・それから」	599 ② : 30
『国際子ども図書館調査研究シリーズ』を創刊しました	608 ⑪ : 31
国際子ども図書館で電子情報が利用できるようになりました	604/605(7)(8) : 42
国際子ども図書館展示会「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより」	606 ⑨ : 31
国際子ども図書館展示会「世界をつなぐ子どもの本ー2010年国際アンデルセン賞・IBBYオナーリスト受賞図書展」	604/605(7)(8) : 40
国際子ども図書館展示会「日本の子どもの文学ー国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」	598 ① : 30
国際子ども図書館夏休み催物「科学あそび2011」	603 ⑥ : 31
国際子ども図書館春休み催物「子どものための絵本と音楽の会」	598 ① : 31
国際政策セミナー「世界経済の動向と日本の成長戦略」	609 ⑫ : 26
『国立国会図書館資料デジタル化の手引き 2011年版』を刊行しました	606 ⑨ : 32
国立国会図書館データベースフォーラム	603 ⑥ : 30
「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス（Web NDL Authorities）開発版」を公開しました	604/605(7)(8) : 41
サービスの終了・一時休止	607 ⑩ : 34-35
シリーズ・いま、世界の子どもの本は？（第4回）「いま、ドイツの子どもの本は？」	600 ③ : 35
資料保存特別研修「図書館・文書館におけるマイクロフィルム・写真の取扱いと保存」	598 ① : 34
第13回図書館総合展に参加します	607 ⑩ : 37
大規模デジタル化に伴う資料の利用停止について	601 ④ : 28
調査報告書『世界の中の中国』『科学技術政策の国際的な動向』を刊行しました	601 ④ : 29
帝国議会会議録検索システムが使いやすくなりました	603 ⑥ : 32
デジタルコンテンツの拡大ー『石巻日日新聞』号外のデジタル画像を提供開始、デジタル化した蔵書34万点の提供開始	608 ⑪ : 28

電子ジャーナルの遠隔複写サービスを開始しました	601 ④ : 30
東京本館の資料の一部を関西館へ移送します	602 ⑤ : 29
「日本全国書誌」が変わります	608 ⑪ : 28
「日本法令索引」から帝国議会議録を参照できます	607 ⑩ : 35
「日本法令索引」のデータが充実しました	602 ⑤ : 30
年末年始のご利用について	608 ⑪ : 29
平成22年度利用者アンケートの結果を公表しました	598 ① : 32
平成23年度アジア情報研修	609 ⑫ : 29
平成23年度科学技術情報研修	602 ⑤ : 35
平成23年度国立国会図書館職員採用試験	600 ③ : 34
平成23年度児童サービス協力フォーラム	609 ⑫ : 28
平成23年度障害者サービス担当職員向け講座	607 ⑩ : 39
平成23年度図書館情報学実習生を募集します	600 ③ : 36
平成23年度の図書館員を対象とする研修	602 ⑤ : 32-33
平成23年度レファレンス研修	604/605 ⑦⑧ : 43
「本の万華鏡」第6回「へのへのもじえー文字で絵を描くー」	600 ③ : 37
本の万華鏡（第7回）「ドイツに学び、ドイツに驚くー近代日独関係のひとコマ」	604/605 ⑦⑧ : 41
本の万華鏡（第8回）「津波ー記録と文学ー」	609 ⑫ : 30
「歴史的音源」が利用できるようになりました	603 ⑥ : 29
歴史的音源の配信試行にあたり参加館を募集します	608 ⑪ : 30
レファレンス業務に関する研修に講師を派遣します	599 ② : 31

『国立国会図書館月報』のご購入については
社団法人 日本図書館協会へお問い合わせください。

バックナンバーも取り扱っております。

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812(販売)



CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Takeaki Enomoto and photographs : excellent observation skills
- 04 Digital Exhibition “Japanese Mathematics in the Edo Period”
- 10 From Exhibition “Graphic Magazines in Meiji, Taisho and Showa Eras”
Modern printing technology (2) Lithographs, chromolithographs, collotypes and relief halftones
- 14 Libraries beyond libraries : integration, innovation and information for all
World Library and Information Congress - 77th IFLA General Conference and Assembly
- 21 Essay on languages (11) Definite or indefinite
- 09 <Tidbits of information on NDL>
Tokyo Main Library Main Building turns 50 years old!
- 22 <Books not commercially available>
○ *Chiyoda no bakumatsu : 150-nen mae no seso to bunka : Heisei 22-nendo tokubetsuten*
○ *Tokyo shoseki hyakunenshi*
- 24 <NDL News>
○ New Deputy Librarian
○ 14th mutual visit program with the National Library of Korea
○ Laws established
- 25 <Announcements>
○ New National Bibliography
○ International Policy Seminar “Global Economy and Growth Strategy of Japan: Policy Implications after the Earthquake”
○ Lecture at the International Library of Children’s Literature “Asking Mr. Shuntaro Tanikawa: Poems are Picture Books, Picture Books are Poems”
○ Cooperation forum for children’s services FY2011
○ Training program on Asian information FY2011
○ Kaleidoscope of Books (8) “Tsunamis: Records and Literature”
○ Book notice - Publications from NDL
- 31 Annual index to *National Diet Library Monthly Bulletin*, nos. 598-609

国立国会図書館月報

平成23年12月号 (No.609)

発行所 国立国会図書館
編集責任者 山田敏之
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成23年12月20日発行 定価525円
(本体500円)

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03 (3523) 0812 (販売)
FAX 03 (3523) 0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 「刊行物」 > 「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



清水良雄画 『コドモノクニ』第11巻第14号 表紙
昭和7（1932）年12月 東京社 26cm
<請求記号 Z32-B158>

国立国会図書館月報

平成23年12月20日発行（毎月1回20日発行）
（12月号通巻609号）

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525円（本体 500円）